

# パンクする京都

オーバーツーリズムと戦う観光都市

中井治郎

人口150万人の街に年間5000万人の観光客が殺到する

「もう観光客は  
たくさんだ！」

舞妓パラッチ、景観破壊、民泊問題が伝統と格式の街を蝕む。



パンクする京都

オーバーツーリズムと戦う観光都市

中井治郎

星海社

156



SEIKAISHA  
SHINSHO



世界の果ての“観光地”

2019年5月。ちょうどこの本の企画について編集者とのやりとりがはじまった頃、「エベレストでさらに4名死亡」というニュースが目にとまった。よくある山岳事故のニュース、ではなかった。それはとても奇妙な事故だった。エベレスト山頂付近で続発する死亡事故について犠牲者のうちのひとりのインド人登山者の死が報じられていたが、奇妙なのはその死因である。その不幸な登山者の死因は、エベレスト山頂付近で「12時間以上の混雑」に巻き込まれたことによる極度の疲労だったのである。

そして記事に添えられた写真に目を疑った。澄んだ青空を背景に鋭く切り立つエベレストの山頂。そこに写っているのは、山頂の切っ先に向けて、びっしりと数珠<sup>じゆず</sup>つなぎに連なる登山者の長い長い行列であった。「ここで12時間待つのか……」思わず言葉を失う。デイズニールランドよりもコミケよりも、まちがいなく世界でもっとも過酷な行列である。

90年代から一般の登山客に向けてエベレスト山頂への登山を開放してきたネパール政府は、近年、希望者の増加を受けて登山許可証の発給数を増やしてきた。そして2019年の登頂者数は過去最高となる見込みであるという。

その結果がこの山頂へと続く長蛇の列なのだ。エベレスト山頂といえば標高8848メートル、いうまでもなく地球上でもっとも人間にとって生存が困難な場所である。そして、そこに押し寄せた登山客たちが12時間待ちの大行列を発生させる。30年前ならばまったく想像することもできなかった光景かもしれない。

そんな記事を見て思い出したことがある。2009年8月、モアイ像で有名なチリ領イースター島を訪れた時に僕が巻き込まれた、ある事件である。首都サンティアゴから3700キロ、もっとも近い有人島までも2000キロあるという絶海の孤島イースター島。この地球上でもっとも文明から遠い場所のひとつといえるだろう。そんな島で島民たちが島で唯一の空港に突入し、これを封鎖した。たまたまそのとき島にいた僕をふくむ外国人観光客たちは島を脱出することができなくなったのである。島民たちは怒っていた。

「もう観光客はたくさんだ！」

いつ飛ぶとも分からない飛行機を待つしかない「観光客」である僕は、太平洋に沈む夕日を眺めながら途方に暮れていた。こんな世界の果ての島にも観光客が押し寄せている。そして島民たちは観光客が目当てにするモアイではなく、これこそ自分たちの誇りだというカヌーのマークの旗を掲げていた。彼らはいったい何に怒っていたのだろうか。

### 新語「オーバーツーリズム」の誕生

エベレストにイースター島。もはやこの地球上でカラフルなアウトドアウェアを着込みリュックサックを背負った観光客の姿をみかけない場所を探すことは難しいのかもしれない。2019年2月に国連世界観光機関（UNWTO）が発表した世界における国際観光客数は推定で約14億人。2010年に発表された長期予測では14億人を達成するのは2020年と見込まれており、この予測が2年も早く突破されたことになる。

かつて先進国の人々のあいだで海外旅行が大衆化しはじめた1960年代後半の年間国際観光客数は1600万人程度だった。つまり、海外旅行者の数は50年間で約90倍となっ

たのである。一方、世界人口の増加は40億人程度から70億人ほどなので、この数十年いかに猛烈なスピードで多くの人々が海外旅行をするようになったかがわかるだろう。

もちろん、これまで人類が経験したことのない観光客の大発生は多くの人々にとってチャンスであった。過疎化に悩む農村から、再開発が思うように進まないまま疲弊していた歴史ある古都<sup>こと</sup>、そして先進国から発展途上国まで、世界中のあらゆる特性をもった地域がこれをチャンスと見込み観光産業を起爆剤とする地域活性に取り組んできた。

しかし近年、ベネチア、アムステルダム、バルセロナなど、観光地として世界的な知名度を誇る各都市において住民たちの怒りが爆発している。彼らは叫ぶ。「もう観光客はたくさんだ！」10年前に僕がイースター島で出会ったあの光景が、いまや世界中に広がっているのだ。そして、そんな彼らの怒りはここ数年で急速に世界中に伝播したひとつの新語を誕生させた。地域の生活や環境、そして観光客自身の観光体験にさえダメージを与えるほどの過度な観光化を指す言葉、「オーバーツーリズム (overtourism)」である。

## 躍進？ 暴走？ 観光立国・日本の10年

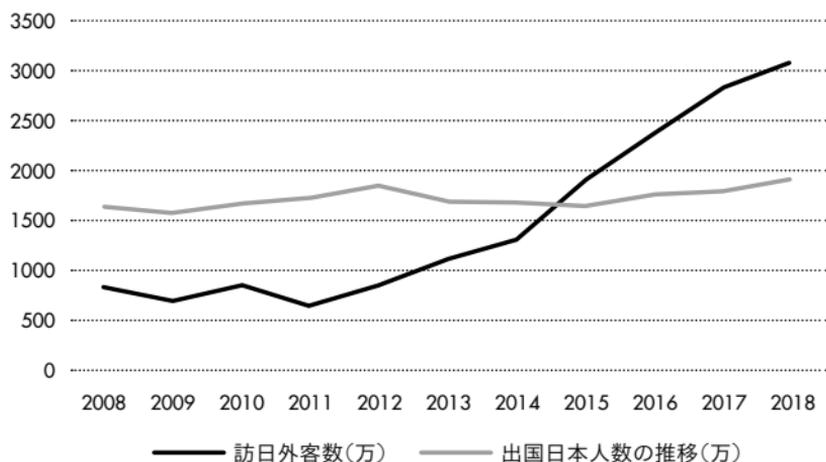
2008年、新たな省庁として観光庁が設立された。それからの10年間は日本にとって

「クール・ジャパン」そして「観光立国」という旗印のもと国民あげての観光振興・インバウンド誘致にまい進し、また翻弄された10年間であった。もともとは外国へ旅行する出国日本人旅行者に対して訪日外国人旅行者の数が「少なすぎる」ということが問題となつて取り組み始めた日本のインバウンド誘致政策であったが、その成果は目覚ましく、政府の予想を超える勢いで外国人観光客は増え続けている。

とくに円安やビザ発給要件の緩和、LCC路線の就航などが功を奏し、2012年当時は836万人だった訪日外国人は2018年には3119万人にのぼるまでとなった。ほんの5、6年ほどの間に実に4倍に近い増加ぶりである。

そして訪日外国人観光客による特需を象徴する現象「爆買い」が流行語大賞に選ばれた2015年、実に45年ぶりに訪日外国人旅行者数が出国日本人旅行者数を上回った。つまり、ついに我が国は「観光する国」から「観光される国」に逆転

訪日外客数と出国日本人数の推移



出所：JINTO（日本政府観光局）

したのである。

しかし、多くの人の予想を超える増加とは、言い換えるならば「暴走」である。この暴走が観光にかかわるさまざまな場面で問題を巻き起こすこととなった。そして世界各地で被害が叫ばれてきたオーバーツーリズムの波が、ついに日本にも到達する。その最前線であり、最たる「被災地」が、世界でもっとも人気のある観光都市のひとつであり、日本を代表する古都、京都なのである。

### オーバーツーリズム最前線、京都

「この時期、京都行くやつはDM」お花見の頃、ゴールデン・ウィーク、夏の祇園祭ぎおんまつり、そして紅葉の頃など、観光都市・京都が世界中の観光客でごった返す行楽シーズンになるとインターネットではしばしば見かける決まり文句である。僕は京都に本部を置く大学で講義と研究をしながら、現在、京都で暮らしている。ネットの読み人知らずの書き込みといえども、その愚痴ぐちとも警告ともつかない独り言は身に染みるくらい、よく分かる。

たとえば花見や紅葉の季節などには全国のニュースや情報番組で、押しかけた観光客で身動きもとれないほどの京都の名所の混雑がまるで風物詩のように報じられる。しかし多

くの住民はもちろんそんな時期にわざわざ観光名所には近寄らない。テレビで近所の寺の混雑を眺めるのみである。そしてこの時期は観光名所だけにとどまらず、市内各所の交通が「いつもどおり」マヒしているであろうことも知っている。そして眩くのだ。「はあ、やっぱり今日は出かけるの、やめとこか」

そもそも京都市の人口は150万ほどである。これをもし関東の都市に置き換えるなら川崎市と同程度の人口規模ということになる。しかし、京都は山に囲まれた小さな盆地であり、「どの飲み屋で終電を逃しても歩いて帰れる」といわれるほどに狭い。そこに、天皇が居を構えていた京都御所、そして市内だけでも14件の世界遺産をふくむ広大な敷地を持つ離宮や神社仏閣がひしめきあっている。さらに厳しい都市景観行政のため市街地の狭い空間を有効に利用するための高層ビルやタワマンの建設もできない。そんな窮屈きわまらない街に150万人が押し込まれているのだ。そこに毎年5000万人以上の観光客が押し寄せている。それが古都・京都の実情である。

とくに2011年度には50万人程度であった外国人宿泊客数はその後、誰も予想していなかったようなスピードで激増し、2018年にはその約9倍である450万人にまで膨れ上がった（外国人観光客数全体ではおよそ805万人）。いまや有名な観光名所にかぎらず、

京都のあらゆる場所で彼らが大きなキャリーケースを引っぱりながら歩いている、いや、「渋滞」している姿を見ることができる。

なにより厄介なことは、京都を訪れる観光客の目当ては自然豊かな景勝地などではなく、人々の生活空間のなかに点在する寺社や史跡、さらには町並みなど人々の暮らしの場そのものであることだ。つまり京都は街全体が観光名所ともいえるのである。朝、寝ぼけながらゴミ袋を片手に玄関を開けると、目の前にまさに「京都の町並み」を撮ろうとしている観光客のカメラと目があつたので慌てて戸を閉めた……京都ではしばしば聞く話である。多くの人にとって観光地とは非日常空間であるが、「観光される」京都の住人にとってはそれがまさに日常なのである。

世界各地の観光都市でオーバーツーリズムが問題となっていると述べたが、とくに反観光運動の激しい事例にはあ

### 京都市の外国人宿泊客数と観光消費額

年度	外国人宿泊客数(実数)	京都市観光消費額
2008	94 万人	6561 億円
2009	78 万人	6088 億円
2010	98 万人	6492 億円
2011	51 万人	
2012	84 万人	
2013	113 万人	7002 億円
2014	183 万人	7626 億円
2015	316 万人	9704 億円
2016	318 万人	1 兆 862 億円
2017	353 万人	1 兆 1268 億円
2018	450 万人	1 兆 3082 億円

出所：京都市観光総合調査

\*2011 年度、2012 年度の観光消費額は調査手法の変更により推計せず

る共通点がある。それは歴史のある町並みや市場など、人々の生活の場そのものが観光の対象となってしまう場所であるということである。地域住民と観光客の動線が重なれば重なるほど、バスや道路、さらには商店など、あらゆる生活インフラの奪い合いとなってしまうのだ。また、そもそも観光とは関係なく生活している地域住民の暮らし自体が「見世物」化していくということの問題や不満も無視できない。そして、さらに近年は、地域住民の暮らす住宅地や集合住宅のなかに深く入り込んでいくことでコミュニティを破壊しかねない民泊の問題なども、各地で観光客と地域住民の関係をより厳しく対立的なものへと変えつつある。

世界的に観光が引き起こす問題に注目が集まる一方で、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催をひかえた政府は「観光ビジョン実現プログラム2019」を策定、2020年度の訪日外国人旅行者数の目標を4000万人とした。さらに2030年には現在のほぼ倍である6000万人と見込んでいる。

いま京都が直面している問題は、オリンピック開催地である東京を含め今後さらに深刻な問題として全国さまざまな街を襲うだろう。そのような意味では我が国におけるオリンピック・バレーボール最前線である京都の「戦況」は全国が注視すべきものといえる。

本書では観光都市・京都が現在、直面する問題を読み解くために以下のような順に考察を進めていこうと思う。

まず第1章では、インバウンド・ブームによってこの街に利益をもたらすはずだった観光が京都でいまどのように問題化されているのか、その現状を報告する。

第2章では、歴史上に類を見ないほどの訪日外国人観光客の急増という事態に日本社会がどのように反応しているのか、とくに外国人観光客を「迷惑」な存在とみなす「観光客ざらい」という視点から検証する。

第3章ではオーバートゥリズムが問題となるほど多くの人が京都を観光するようになった理由を理解するために、日本を代表する「古都」としての観光都市・京都がどのように形づくられていったのか、その歴史的経緯を追う。

そして最後の第4章では現代の観光的文脈の中で京都がどのような場所性を持つのかを考察する。いま人々は京都に何を求めているのか、そして、なぜいまオーバートゥリズムという形で、京都で観光が問題とならざるを得なかったのか。それが最後の問いである。

そしてさらに、「戦場」のリアルを直接読者に届けるために5本のインタビューを収録し

た。それまで思いもかけなかった外国人観光客の急増に戸惑う寺院。観光客に自分たちの生活を乱され、守り継いできた伝統までも脅かされる花街。わが国でも前例のない事態に創意工夫で立ち向かう「課題先進都市」の行政。そして、観光という出会いのなかで外国人たちにこの街で日本の文化を伝えようとする人々。

これらのインタビューで語られた、それぞれの立場から見た観光都市・京都の現在と、それぞれの「戦場」で模索されてきた戦いの知恵は、京都というひとつの街の出来事を超えて、来たるべきオーバーツーリズムの波に身構える全国の人々のもっとも頼もしい導き手となるだろう。

世界各国の観光地のように京都の人々も路上を埋め尽くして「観光客はもうたくさんだ！」とオーバーツーリズムに怒りを叫ぶ日が来るのだろうか。それとも、非日常を楽しむ観光客と日常を暮らす住民とが同じ場所で共生する「持続可能な観光」がこの街で実現するのだろうか。

殺到する5000万人の観光客を迎え打つ小さな盆地で、いま、この国で誰も見たことのない戦いが始まる。

目次

はじめに 3

京都市内地図 17

第1章

京都がパンクする!?

19

“世紀の愚策”と呼ばれた京都改造計画 20

花街に押し寄せる「舞妓パラッチ」 23

「日常」に侵入する観光客 28

「インスタ映え」で地価高騰? 30

「お宿バブル」が街を塗り替える 33

民泊がもたらした「お宿カオス」 36

世界はそれを「オーバーツーリズム」と呼びはじめた 41

インタビュー① オーバーツーリズムと戦う京都の和尚さん「信仰と観光をこっちゃんにしたらあかん!」 46

## 第2章

# 日本社会に蔓延する「観光客ざらい」

59

観光は「おいしくない」<sup>60</sup>

京都から押し出される日本人<sup>63</sup>

インバウンド市場の主役は中国人<sup>69</sup>

日本社会の「観光客ざらい」<sup>72</sup>

インタビュー② 舞妓パパラッチに脅かされる祇園ブランド 「観光されたくない」街のSOS<sup>84</sup>

インタビュー③ 京都市、かく戦えり！ オーバーツーリズム最前線からの報告<sup>92</sup>

## 第3章

# 「京都らしさ」の正体 ～観光のまなざしと「古都」化する京都

105

京都ブランドは「観光ありき」ではなく「文化ありき」<sup>107</sup>

京都観光史～京都はいつから「古都」なのか？<sup>114</sup>

京都タワーと京都駅ビルがもたらした景観論争<sup>122</sup>

## 第4章

### 京都は誰のものか？

159

我々は観光客に何を奪われるのか

160

テーマパーク化する京都

162

「そうだ 京都、行こう。」時代の京都リピーターたち

128

インタビュー④ これぞクールジャパン最前線!! 刀で「日本」を伝える京都のサムライ塾

140

インタビュー⑤ 狭い、不便が逆に良い!? 超人気町家旅館のおもてなし 日本の「日常」をプロデュース

146

おわりに 185

参考文献 190

# 京都市内地図



- ① 京都御所：東京遷都までは天皇の住まう「都」の証 (p118)
- ② 鴨川 (賀茂川)：ただの水でも「京」ブランドなら売れた!? (p117)
- ③ 京都ヨドバシ：「爆買い」最前線で起こった「転売ヤー」騒動 (p73)
- ④ 消えた幻の芸術橋：京都のど真ん中にパリ風の橋が出現？ (p127)
- ⑤ 祇園界隈：★現場インタビュー収録 (p24,85)
- ⑥ 四条通：京都の顔ともいえる目抜き通り (p20)
- ⑦ 東山区：町家が並ぶ王道フォトスポット (p34)
- ⑧ 嵐山：★現場インタビュー収録 (p47)
- ⑨ 東寺：“東寺の塔より高い建物を建ててはいけない”は京都の不文律だった (p124)
- ⑩ 京都タワーと京都駅ビル：「京都らしくない」と嫌われた京都のシンボル (p122)
- ⑪ 京都市役所：★現場インタビュー収録 (p92)
- ⑫ 立誠小学校：築90年の廃校は今…… (p160)
- ⑬ 鴨川デルタ：森見登美彦作品の聖地 (p158)



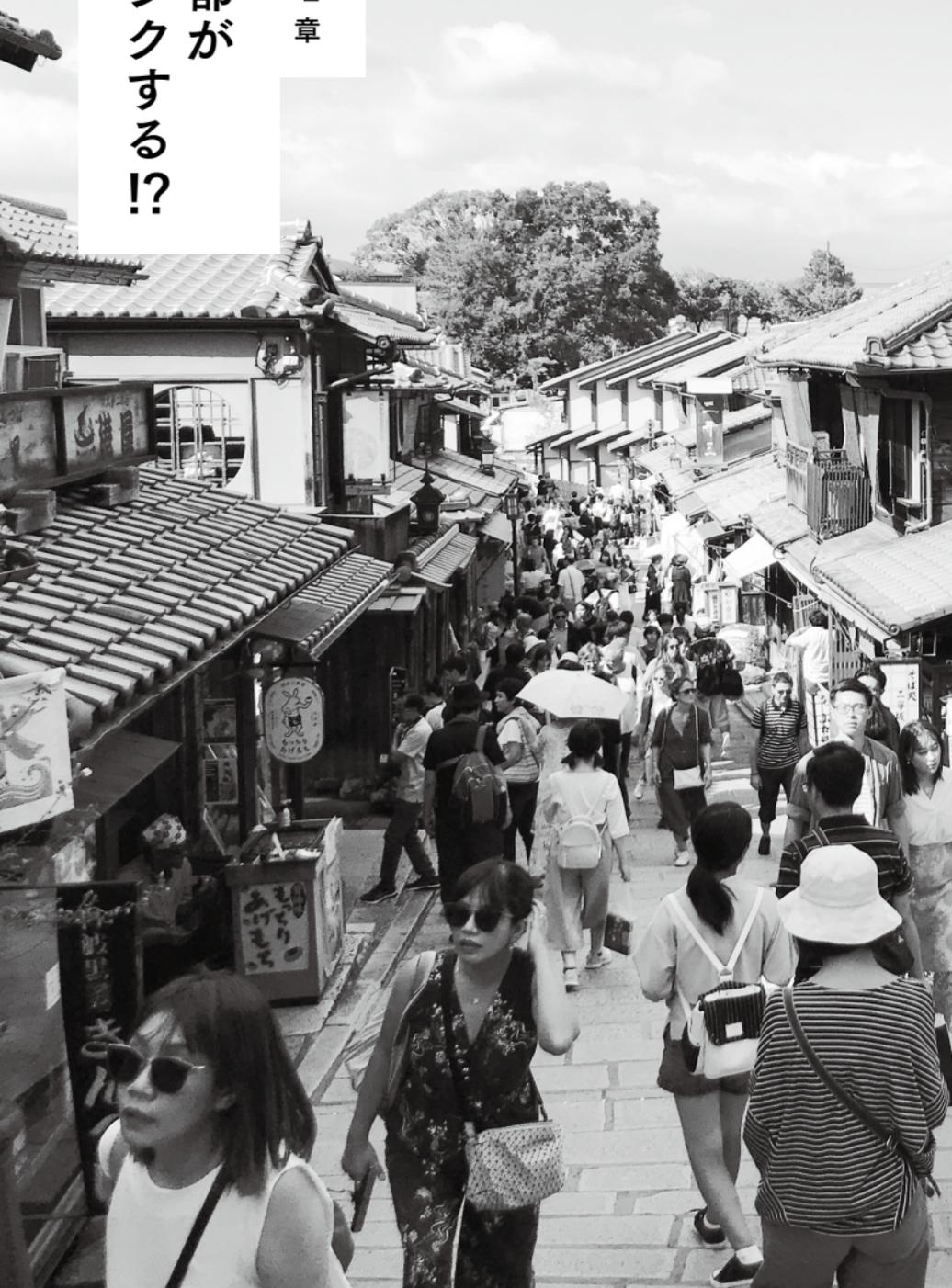
珈琲  
COFFEE

OPEN

二寧坂  
(二年坂)

京都が  
パンクする!?

第  
**1**  
章



いや、正直なところ、気が乗らない。京都の中心市街地を東西に貫く四条通しじょうどおり。この街で歴史を刻んできた百貨店が立ち並ぶ、まさに京都の顔ともいえる目抜き通りである。気が乗らないというのは、この四条通を歩くことである。

いつもは（おそらく京都在住者の多くがそうしているように）四条通の地下を伏流水のように走る古い地下道を歩き、目的地付近まで来ると適当な出口から地上に顔を出すというモグラのような移動をしている。できるだけ四条通を歩くことを避けようとしているのだ。目抜き通りとはいえ、四条通は僕にとつては少し億劫な通りなのである。

いったい何が億劫なのか。オーバートーリズムに悩まされる京都の現在を伝える本章はまず、この四条通の億劫さから始めようと思う。

### “世紀の愚策”と呼ばれた京都改造計画

この数年でガラッと変わった京都の風景。四条通もずいぶん様変わりした。数年も京都にご無沙汰している人が再訪したなら、その変わりように驚くのではないだろうか。

なによりも四条通の景色を一変させたのは「世紀の愚策」とまでいわれた京都市の「英断」である。

そもそのきっかけは京都の名物である交通渋滞だった。長年の課題であったこの問題を解決するためにこの街の交通のあり方そのものの抜本的な改革に着手することになった京都市は、ついに大英断を下す。それは慢性的な渋滞に悩まされる目抜き通り・四条通の車線を「あえて」削減し、「逆に」歩道を拡幅するという、まさに「その発想はなかった」という歩道拡幅事業であった。

当然といえば当然なのであるが、その結果、当初は悪夢のような大渋滞と大混乱を引き起こすことになり、京都市のこの歩道拡幅事業の顛末を「世紀の愚策か」と書き立てる新聞記事まで出るほどの事態となった。

しかし、結果的には、この「英断」によって京都の目抜き通りの主役が見事に交代することとなった。車線を減らすことで、四条通は自動車にとつて「不便な道」になった。そのおかげで、これまで通りを我が物顔に占拠していたマイカーたちをこの目抜き通りから遠ざけることに成功したのである。

そして代わりに新たな主役たちがこの四条通にやってくることになった。新しい主役たちはカラフルなりュックサックを背負い、巨大なキャリーケースを転がしながらやってきた。道いっぴいの外国人観光客たちである。

この歩道拡幅が行われたのは2015年。これは外国人観光客による「爆買い」が流行語となり、45年ぶりに訪日外国人旅行者数が出国日本人旅行者数を上回った年である。そして、世界でもっとも影響力があるといわれる米国の旅行雑誌『トラベル+レジャー』において、バルセロナ、ローマ、フィレンツェなど綺羅星のような世界的観光都市を押さえ、2年連続で京都が人気観光都市ナンバー・ワンに選ばれた年でもある。つまり四条通の主演交代劇は、世界的な京都観光ブームの盛り上がり、奇跡とも必然ともいえる絶妙なタイミングでシンクロした出来事だったのである。これは京都にとって象徴的な転換点といえるだろう。

この四条通は京都の中心部であり、京都駅に次ぐ交通の要衝ようしゅうである。いまや通り自体が大きなバスターミナルの様相を呈し、多くのバス停のルーフが軒を連ね、揃いのゼッケンをつけた係員に誘導されながら長い行列に並んだ大荷物の観光客たちが次々にバスのなかに吸い込まれていく。ひっきりなしにバスはやってくるが、運んでも、運んでも、運ばれるために集まってくる観光客の行列は絶えない。窓越しにバスの車内をのぞくと、ラッシュアワーでなくとも立錐りっすいの余地もないすし詰めである。そうして毛細血管を走る赤血球のように京都の隅々にまで観光客を送り込んでいく。

「乗れないし、いちど乗ったら降りられない」そんな風にもいわれるバスの混雑と、それをさばく手際の良さ。京都の顔・四条通は、いまや、史上空前の観光ブームに立ち向かう京都の奮闘ぶりが垣間見られるスポットのひとつとなっている。

とはいえ、歩道を歩いていると、人の波である。たった数年前までは歩道の幅がこの半分ほどしかなかったことなど、いまとなっては到底信じることはできない。「歩いて楽しめる」という京都市の掲げたコンセプトどおり街を楽しみながらゆったり歩く観光客たちを（視界の死角から膝<sup>ひざ</sup>を攻めてくる彼らのキャリーケースに注意しつつ）追い抜き、すり抜けながら、懐かしの縦スクロール・シューティングゲームのように進んでいくことになる。

### 花街に押し寄せる「舞妓パラッチ」

四条河原町<sup>かわらまち</sup>の交差点を渡って鴨川<sup>かもがわ</sup>を目指す。そうすると次第に歩道の幅は狭くなり、すり抜けも追い抜きも困難になる。なすすべもなく、ただ人波に流されるまま東へと運ばれ



市バスに不慣れな外国人観光客も手際よく誘導していく

ていく。京都を代表する近代建築であり、森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』で全国の文化系男女に広く知られるところとなるも結局は僕も友人の結婚式のときにしかくぐったことのない東華菜館とうかさいかんの美麗きわまる玄関の前を素通りすると、四条大橋にさしかかる。夏に先斗町のお店が出す川床かわどこと河川敷に等間隔で座るカップルが名物である鴨川にかかる橋である。「ああ、川面を走る風が気持ちいい」などと思いつつも、鴨川をバックに肩を寄せ合う観光客の自撮り棒を我ながら慣れた身のこなしで避けつつ対岸を目指す。このまま川端通かわはたどおりを越えると歩道に地元住民らしき人の姿はぐつと少なくなり、歩道沿いの商店もお土産物屋や観光客向けの飲食店がほとんどになる。「観光客が多くて億劫な」四条通もこの辺りまで来ると、「観光客が多い」どころではなく、ほぼ「観光地の道」となる。

そして京都を代表する花街として有名な祇園ぎおんに差し掛かると、時代劇でよく見かける高札のような看板が目に入る。歩き煙草たばこ禁止やゴミ捨ての注意などが示されており、外国人観光客に対してマナー周知のための「御触書おふれがき」ということなのだろうと分かる。そしてとくに印象的なのが舞妓さんに伸びる怪しげな手



マナー啓発を呼びかける「高札」

である。

この辺りは、舞妓さんや芸妓さんげいこが座敷ざしきを歩き来するお茶屋さん、そして彼女たちが寝起きする屋形やかたがある地区であり、この花見小路はなみこうじはいわゆる京都五花街といわれるうち最大の花街である祇園甲部のメインストリートである。とくに景観の整備された南側を中心にここ数年は多くの観光客でにぎわう通りだ。しかし、聞くところによると観光客による舞妓さんへの迷惑行為が問題化しているという。この界限に外国人観光客が押し寄せるようになったのは5年ほど前、2014年前後からとのこと。その頃から単なる人の多さのせいだけではできないトラブルが数多く起きているようだ。

日が落ちる頃、舞妓さんたちはそれぞれ呼ばれたお座敷へと向かう。よく見てみると舞妓さんや芸妓さんの名札がかけられた屋形の前に、カメラやスマホを持った外国人観光客が人だかりをつくっている。どうやらここから舞妓さんが「出勤」することが分かって待ち受けているらしい。また通りを見ていると、10センチ以上もの高



最近とくに増えたのは中国人の団体客だという

さになるおこぼを履いた舞妓さんが駆け抜けるように歩いていくのを（忙しい彼女たちはとにかく歩くのが速い）、24時間テレビのマラソン中継しながらに並走しながら動画を撮影している観光客も1人や2人ではない。そしてタクシーが止まるたびに、今度こそは舞妓さんが乗り降りするのではないかと期待した観光客が集まってきてタクシーを囲み、バシヤバシヤとシャツターを切る。

花街とはそもそもどのような場所であったかを知っている人間からすると啞然とするような光景である。こんな風に舞妓さんを執拗に追いかける観光客たちの様子を見た誰かがこう言ったらしい。

「まるでパパラッチじゃないか」

近年、祇園で問題となっているのが、このような舞妓さん目当ての外国人観光客による数々のマナー違反行為である。無遠慮な撮影攻勢に始まり、声かけ、着物にさわる、カメラやスマホを向けてのつきまといなどその種類はさまざまであるが、いつしか、これら舞妓さんを襲う外国人観光客のマナー違反行為の数々を総称して「舞妓パパラッチ」と呼ぶ

ようになった。さきほどの高札が警告していたのは、このような、舞妓パラッチに対する注意喚起なのである。

舞妓さんの着物を破られた、衿元えりもとに煙草すいがらの吸殻すいがらを投げ入れられたなど、にわかには信じられないようなひどい話を耳にする機会も増えた。この界限に押し寄せている外国人観光客たちの存在は、彼女たちにとってもはや迷惑どころか「危険」な存在になっているといえるだろう。

もともと歴史的景観地区として花街らしさを生かすように整備され、伝統的な花街の風情を残す建物が並ぶ通りなのだが、通りを埋め尽くして我が物顔で座り込んだり舞妓を追いかけているのは花街には場違いな観光客たちである。たとえばデイズニールランドはセツトからスタッフまで完璧に統一された世界観を構築していることで有名だが、あの空間で唯一、デイズニールの世界観に合致していない場違いな存在は客である。祇園・花見小路の町並みと、通りを埋め尽くすカジュアルな観光客たち。このちぐはぐさを見てみると、まるで自分がテーマパークの一角にいるような錯覚を覚える。はるばる京都まで非日常を体験しに来た彼らも、自分がいまテーマパークにいるように感じているのかもしれない。デイズニールランドでミッキーの登場を待つように、彼らはこの通りで舞妓さんの「登場」を

待っているのかもしれない。

しかし、京都で暮らす人々にとってこの街は生活の場であり、日常であり、まぎ紛れもない現実である。日々の暮らしのなかで、昼夜を問わず「舞妓パラッチ」の猛威に晒される彼女たちはテーマパークで客を楽しませる着ぐるみのキャストではない。ここで仕事をし、生活をしている生身の人間なのである。

### 「日常」に侵入する観光客

大型バスで大きな駐車場に乗り付けるとそこから吐き出された大量の観光客が行列を作って見物に向かい、30分後にはまた彼らを乗せて走り去る……そのような光景に象徴された従来のマス・ツーリズム（大衆観光）。そこにおいては、いわゆる「名所」といわれる自然景観や旧跡きゅうせき、寺社仏閣などが観光の目玉だった。バスを降りて、いつもテレビで見える画角をこの目で確認して写真を撮ったら、それ以外には目もくれずに次の名所へと急ぐというスタイルである。

それは、たしかにごく一面的にしかその土地の文化に触れられないなど、「見る」側の観光体験としては物足りなさを感じる人も多いかもしれないスタイルではある。しかし、一

方で観光客を受け入れる「見られる」側としては、限定された場所のなかだけで集中的に観光客を受け入れるため、彼らが引き起こす問題の被害も限定的なものに抑えることができるというありがたい側面もあった。

しかし、近年の観光においてはそれらの定番の観光名所に加えて「まちなか」観光などが人気である。これはつまり従来のマス・ツーリズム的な観光スタイルに飽きた人々が、その地に暮らす「人々の暮らし」を見る・体験することに関心を向け始めたということである。

観光客向けに計算され演出しつくされていく場所よりも、観光とは関係のない（ように観光客には思える）リアルな人々の暮らしにこそエキゾチックな魅力が見出される。つまり「ホンモノっぽい」として好まれるのだ。

その結果、京都の人々の生活の場の奥深くにまで、カメラを携えた人々が押し寄せることになった。まるでテーマパークのキャストを撮影するように、無数のカメラが、観光とは関係のないそれぞれの生活を営んでいる人、つまり「ふつうに暮らす人々」を狙うことになったのだ。

地元の主婦を相手にしていた昔ながらのお店が突然に「京都人ご用達の店」として人気

を呼び観光客がはるばる「巡礼」にやってくるというのも珍しいことではないし、近所の銭湯に行けば噂に聞くジャパニーズ・スタイルの入浴を体験しに来た緊張気味の外国人観光客と一緒に肩を並べて湯船に浸かる……というようなこともすっかり京都の日常になった。つまり、良くも悪くも、それまで観光とは関係のない空間で暮らしていた京都住民の日常と、観光客が非日常として楽しむべき京都が重なり始めているのである。それまで観光地でもなんでもなかった花街にカメラを持った観光客が押しかけ舞妓さんを追い回すようになった「舞妓パラッチ」はまさにこの現象の延長線上に起こった問題といえるだろう。

しかし、過熱する観光化が地域の暮らしに与える影響には、このようなマナー違反をめぐる問題だけにとどまらず、より根本的に地域のありようを変えてしまうこともある。

### 「インスタ映え」で地価高騰？

かつて、他所からくる友人に「何か京都のおすすめはない？」と聞かれると、ものぐさな僕はいつも決まって二つの名所をあげていた。それは「縁切り神社」として有名な安井金比羅宮こんびらぐうで生々しい怨嗟えんさに触れて人間の業ごうを味わうか、または、宵闇よいやみの伏見稲荷大社ふしみいなりたじしや・千

本鳥居で不帰の心細さを味わうか、であった。これらはアクセス至便（バスに乗らなくても行ける）であるわりに金閣寺や清水寺ほど定番化しておらず、しかし訪れてみたときのインパクトが大きいスポットだったのだ。つまり、ある種の「知る人ぞ知る」名所として、京都に不案内な人にも紹介しやすい場所であった。しかし、それも今は昔の話である。

いつの頃からか、こちらが提案する前から「伏見稻荷って京都駅から近いの？」などと先方に問われるような場面が増え、たまに客人の案内などで足を運べば、赤い鳥居のトンネルは果てしなく続く外国人観光客の行列でいつでも渋滞。とても「心細さ」を味わうどころの話ではなくなっ てしまっていたのだ。

それもそのはず。金閣寺や清水寺など昔よりひろく知られた観光名所をふくめ、京都市内には世界遺産「古都京都



「日本一」の「インスタ映え」スポットだが……

の文化財」を構成する14件の世界遺産があるが、世界最大の旅行口コミサイト『トリップアドバイザー』の「外国人に人気の日本の観光スポット」部門における第1位は、他でもないこの伏見稲荷大社なのである。

観光スポットとしての伏見稲荷の大躍進のきっかけは「インスタ映え」にある。2011年には6位だった伏見稲荷大社だが、赤いトンネルのように続く千本鳥居が外国人観光客のあいだで“photogenic”、つまり「インスタ映え」するスポットとして話題になるにつれて、12年3位、13年2位とランキングを駆け上り、2014年度について「日本一」の称号を獲得することになった。そして以後、その栄冠をほしいままにしているのである。つまり、伏見稲荷大社はこの数年間で、「知る人ぞ知る」どころではなく、名実ともに日本一の超定番スポットになってしまったのである。

この観光客の激増は伏見稲荷大社のみならず周辺地域のありようにも大きな影響を与えることになる。伏見稲荷大社の目の前にあるJR稲荷駅前には季節や平日・週末を問わず外国人観光客でごった返すようになり、観光客のための飲食店や土産物店などの新規出店が相次ぐ。このため、2017年には伏見稲荷大社周辺は基準地価の商業地上昇率において全国1位（上昇率29・6%）を記録したとして大きな話題となった。

そして不動産価格の高騰は伏見稻荷だけではなかった。2017年そして2018年の二年連続で全国の商業地の上昇ランキングのトップ10の半数は京都市内の地点が占めることになった。この背景にあるのはもちろん急増する外国人観光客の需要であり、とくに「乱立」ともいわれるほどのホテルや簡易宿所などの建設・開業ラッシュだった。

こうして京都は「バブルの再来か?」といわれるほどの地価高騰、通称「お宿バブル」に直面することになったのである。

### 「お宿バブル」が街を塗り替える

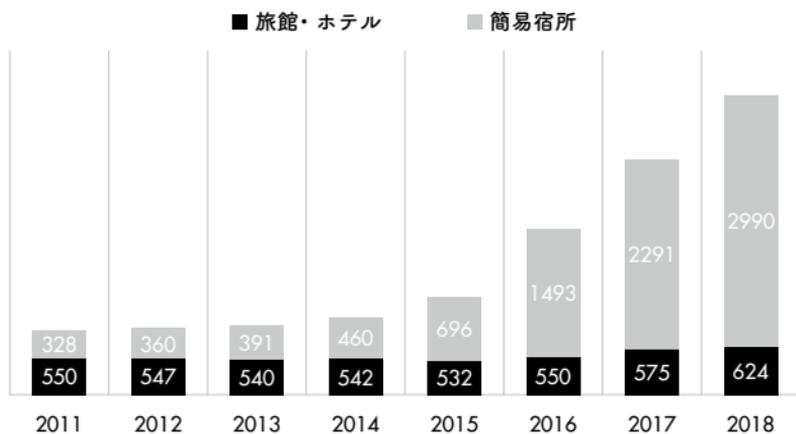
ひとくちに「お宿」といってもさまざまあるなかで京都の「お宿バブル」の主役となったのは、一般的な旅館やホテルよりも小規模な宿泊施設、旅館業法に基づく簡易宿所であった。大型のホテルなどを建設する広い用地の確保が難しいという京都ならではの事情もあり、2014年度には460か所だった京都市の簡易宿所が2018年度には2851か所、そして2019年3月時点では2990か所と、ほんの数年間の間に約5倍もの数に達するという猛烈な勢いで「乱立」したのである。もちろん、増えたのは簡易宿所だけではない。ホテルや旅館、そして後述する民泊など、ありとあらゆる規模やスタイルの「お

宿」が京都市中に乱立した。これは街の景色を塗り替えるのに十分な勢いと数であったといえるだろう。

昔から地域の人々が暮らしていた住まいや店舗が「櫛の歯が欠けていくように」立ち退き、次々と観光客のための四角いホテルや町家を改装した旅館に建て替えられていく。「お宿バブル」といわれたこの数年間の京都で起きていたことを一言でいうなら、このような街の主役の交代劇であった。

そもそも近年、昔ながらの住居が多い京都の中心地では住人の高齢化や町家をはじめとする建物の老朽化、そして空き家の増加が問題となりつつあった。しかし、そのような地域でもインバウンド需要を見込んだ店舗や「お宿バブル」のおかげで、真新しい建物が立ち並び、大きなキャリアケースを転がしながら外国人観光客たちが行きかうようになったのである。このような景色は一見「街に活気が戻った」と見えるものであるかもしれない。しかし、京都の抱えていた問題が

### 京都市内宿泊施設数の推移



出所：旅館業法による許可件数（京都市）

それで解決したわけではなかった。

たとえば、八坂の塔や「清水の舞台」きよみずで

有名な清水寺などを擁し、京都を代表する

一大観光スポットとしてシーズンを問わず

多くの観光客でごった返す東山区。「人が多

すぎて困る」「町並みどころか人しか見えな

い」と観光客が口々に愚痴をこぼすほどの

人波とは裏腹に、いまこの地域で問題とな

っているのはなんと人口減少なのである。

実にピーク時の半分ほどになってしまった

という。その大きな原因のひとつは、「お宿

バブル」などの影響による不動産価格の高騰である。とくに子育て世代などがそこに住宅

を確保することが難しくなってしまうのだ。つまり高齢化に伴って空き家となった住居

が、また新たな住人を迎えるための住まいではなく観光客のための店舗や「お宿」へと変

わっていくのである。



観光客で賑わうも地域の人口流出が問題化

一年中、人波は絶えないのに、ここで暮らす人はどんどん減っていく。昔からの住人のなかには「たしかに活気は戻ったが、まるで自分たちの街ではなくなってしまったようだ」とため息をつく人も多い。「お宿バブル」の表層的な活気とは裏腹に、住民の流出とコミュニティの脆弱化という問題が着実に進行しているというのが現実といえるだろう。

そしてこれら「お宿」とコミュニティの共存の難しさを京都市民にもっとも鋭く突きつけたのが、民泊をめぐる問題であった。

### 民泊がもたらした「お宿カオス」

話は変わるが、先日、昭和生まれの僕の愛車の車検があつたので、近所の自動車工場に車を持ち込んだ。「お兄ちゃん、えらい車やでこれ。ウチ選んで正解やったな」がははと笑う老社長に、「お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」と手のかかる愛車の世話を丸投げする罪悪感と「とりあえず近所の年寄りには立てられるだけ立てておく」という京都暮らしの知恵をもって深々と頭を下げて、僕は早々に退散した。

さて、車を預けてしまった以上、自宅までのんびり歩いて帰らなくてはいけない。

観光客に人気のジャパネスクな京町家……とはいかない、くたびれた長屋がたくさん残

る飾らない京都の下町をぶらぶら歩く。いつもなら車か自転車であつという間に通り過ぎてしまうところなのだが、めずらしく歩いていたおかげで普段なら見過ごしてしまうようなものが目に留まった。一軒の民家のガラス戸に貼つてある赤字の鮮やかな貼り紙である。力強い筆字で「民泊反対」と大書きされ、そして、さらに「町内中猛反対」という添え書きが強烈な印象を与える渾身の抗議声明であつた（※写真参照）。

「おお、また迷惑民泊か」

たまには近所を歩いてみるものだなと思わずしばらく見入ってしまった。たしかに、その隣は目下工事中の模様。現場に掲示された建設計画の概要を見ると、最近とくに京都でも増えているという中国・上海の事業者名。しかし「営業の種類」の欄には「簡易宿所」にチェックが入っている。なんだ、民泊じゃないんだ。ただの勘違いか……。

いやいや、単なる勘違いと片付けられる話でもないかもしれない。これは、それほど京



「民泊反対」一時期の京都ではしばしば見かけた光景

都の住民のなかで「宿に迷惑をかけられる」という恐れと「民泊」が強く結びついているということなのかもしれない。たしかに民泊と地域住民のトラブルは全国で発生していたが、そのなかでもとくに京都の人々は民泊にひどく悩まされてきたといえるのだ。

民泊とは、仲介サイト「Airbnb」などの登場によってここ数年で急速に広まった宿泊業のスタイルである。本来は宿泊施設ではない一般の住宅の一部またはマンションの一室などに旅行者を泊めるものである。大きな資金を準備しなくても手軽に始められるため、学生の小遣い稼ぎから多くの部屋を回しながら大きな利益を上げる民泊専門業者まで、さまざまな人々がこの民泊ビジネスに乗り出した。

2015年には全国の民泊市場は200億円程度だったが、それまで実質的には野放し同然であった民泊営業を規制する民泊新法の施行を翌年にひかえた2017年度には1251億円にまで膨れ上がっていた。さらに民泊市場はいわゆる「西高東低」であり、エリア別では関西（447億円）が関東（434億円）を上回っていた。

このような民泊市場の急速な拡大の背景には、国の期待があったことも事実である。全国で問題となりつつあった住居の空き家・空き室問題と、インバウンドの急増で深刻になった宿不足という二つの問題。これをマッチングして両方をいちどに解決できるのではな

いかという期待である。しかし、その反面、民泊のもっとも大きな「副作用」として問題化したのが近隣住民とのトラブルだ。

「夜中まで家の前を通るキャリアケースの音がうるさくて困る」

「毎朝毎晩、大勢の見知らぬ外国人がマンションを出入りしている。これではオートロックの意味がなくなっているのではないか」

「部屋を間違えた利用者に頻繁に呼び鈴を鳴らされる」

「ゴミの放置、煙草のポイ捨てがひどい」

「利用者とトラブルになっても管理者が誰かも分からない」

町中のいたるところに出現しはじめた民泊。そして、それがもたらした新たな「近所迷惑」。京都の住民たちは戸惑い、怯え、憤った。

なにより厄介なことは、民泊は一般の住居を利用するものであるということだった。これは、それまでホテルや旅館などの営業が禁止されていた住居専用地域でも宿泊業の営業

が可能になってしまったということの意味する。これが全国で民泊をめぐる多くのトラブルを生むこととなったのである。

住居専用地域とは閑静な住環境を守るために商業店舗の出店が規制された地域であり、基本的に観光客とは無縁な地域であった。そのため「見知らぬ人々」が大勢、侵入してくることへの抵抗感も強い。そのうえ「石を投げれば世界遺産にあたる」といわれるほど数多くの（そして毎年増え続ける）観光スポットを擁する京都は、観光スポットと地元の人々の暮らしの場が近接し、モザイク状に入り交じる土地でもある。つまり、民泊業者から見ると、京都市内のあらゆる場所の住居が、「あの有名観光スポットへのアクセス至便！」という売り文句を掲げることができる優良な民泊物件候補であった。

市民の怒りの声に押されて京都の民泊問題が参院選・京都区のひとつの争点とまでなった2016年ごろには、仲介サイトに掲載されている京都の民泊の数は2700件を超え、そして、そのうち7割が無許可営業であった。つまり行政もその実態を把握していない「ヤミ民泊」だったのである。

最近、毎晩、隣の部屋に大荷物人間が出入りしている。どうやら外国人の様子で、言葉も通じない。騒音が気になってマンションの管理会社に問い合わせても、男性の一

人暮らしのはずだと回答しか返ってこない。そういえばマンションの共有部分にゴミが散乱するようになった。每晚訪れる大荷物の人たちは、なぜみんなこのマンションのオートロックの鍵を持っているのか。いったい、お隣で何が起こっているのか……。そんな正体の分からない不安が京都人を襲った。それも1件や2件ではない。じつに2000件に迫る数だったのである。それが京都のヤミ民泊問題であった。

こうして京都がお宿の無法地帯と化している実態が明らかになった。京都を沸かせた「お宿バブル」の実態は、まさにやりたい放題の「お宿カオス」でもあったのである。

### 世界はそれを「オーバーツーリズム」と呼びはじめた

2016年の参院選・京都区では民泊問題が争点のひとつとなったように、その3年後の2019年7月の参院選・京都区で争点となったのが「観光公害」であった。

本書で触れてきたように、京都における外国人観光客の急増は、この数年間で収束するどころか、なお新たに多岐にわたる問題へと次々と波及していくこととなった。そこでこれを総合的にとらえる視点から再び注目を浴びるようになった言葉が「観光公害」である。

この「観光公害」という言葉は、産業的・経済的な要請から、観光都市として位置づけ

なおされていく京都とその文化の行く末を憂えた人類学者・梅棹忠夫うめさねただおが用いた言葉としても知られている。ちょうど高度経済成長期の我が国で、有名観光地に全国各地から団体客が殺到するような「大衆観光」マスツーリズムの弊害がはじめて問題化されるようになった頃のことだった。梅棹は「観光公害」という言葉を使って、観光客に飲み込まれようとしている京都に「観光盛んにして文化滅ぶ」という警鐘を鳴らしたのである。

その警鐘から半世紀。グローバリゼーションが加速度的に進行する現代。国内旅行に飽き足らなくなった世界中の観光客が次々と海を越え、遙か遠くの異国の街を目指すようになった。そして、ベネチア、アムステルダム、バルセロナ……世界の名だたる観光都市が、次々と新しい時代の観光客の津波に飲み込まれ、悲鳴を上げ始めた。

これらの都市は多く共通する問題を抱えるようになった。地域の事情を顧みない観光投機による不動産価格の高騰とそれによる人口流出。交通インフラの麻痺。観光客向けの店舗や宿泊施設の増加による景観や住環境への悪影響。そして観光に寄与しない産業およびそれに関連する文化の衰退など、京都でも多くみられる諸問題である。

一方で地域住民は「見知らぬ人々」が頻繁に生活圏に侵入してくることによる不信感や犯罪への懸念を高め、また「街の主演」が自分たちではなく観光客およびそれにかかわる

外部資本となってゆくため「もう自分たちの街とは思えない」という疎外感も抱くようになった。これらは自分たちの街が観光客のための街にされてしまうこと、つまり「観光客に街を乗っ取られる」ことへの不安と不満であるともいえるだろう。

さらに、これらの地域への悪影響の結果として、地域イメージの悪化がもたらされることになる。これは観光地としては致命的である。たとえば、観光産業が根源的に抱える矛盾<sup>じゆん</sup>を言い表した「観光バスが観光地を滅ぼす」という言葉がある。たしかに観光地は観光客を招かねば何も始まらない。しかし、キャパシティを見誤った観光客の受け入れは地域の市民生活や文化を破壊し、観光地そのものの魅力を奪い去ってしまう。観光地を滅ぼすのは観光客なのである。いくら観光振興といえど、地域が荒廃してしまつては元も子もないのだ。世界の観光都市が直面しているのはまさにこのようなジレンマである。

そして、バルセロナやベネチアなど都市観光振興の世界的なモデルであった地域の人々が、いま実際に「ノーマア・ツーリズム」の声を上げ始めている。世界的な観光地は、いまやオーバーツーリズムと反観光運動の最前線となつてしまつていたのである。

そしてこのような過剰な観光客の増加がもたらす観光地の問題を報道したり議論したりする際、近年、世界中で用いられるようになった言葉が「オーバーツーリズム (Overtourism)

sm)」である。その起源は諸説あり定かではないものの、世界中のメディアでオーバーツーリズムという言葉が頻繁に使用されるようになったのは2016年頃からであったといわれる。

オーバーツーリズムはとても新しく、いまだ若い言葉であると言わざるをえない。いままさに多くの機関や識者によってさまざまな定義づけが議論されている最中である。しかし、2018年にはついに国連世界観光機関(UNWTO)も、「既存の概念を表す新しい言葉」といささか往生際の悪い予防線を張りながらも、このオーバーツーリズムという「流行語」を採用し、世界各地の著名な観光都市で同時に起きているこれらの問題にかんして政策の提言を行うまでにいたった。それほどまでにこの言葉は、いま、求められている言葉でもあるといえるだろう。

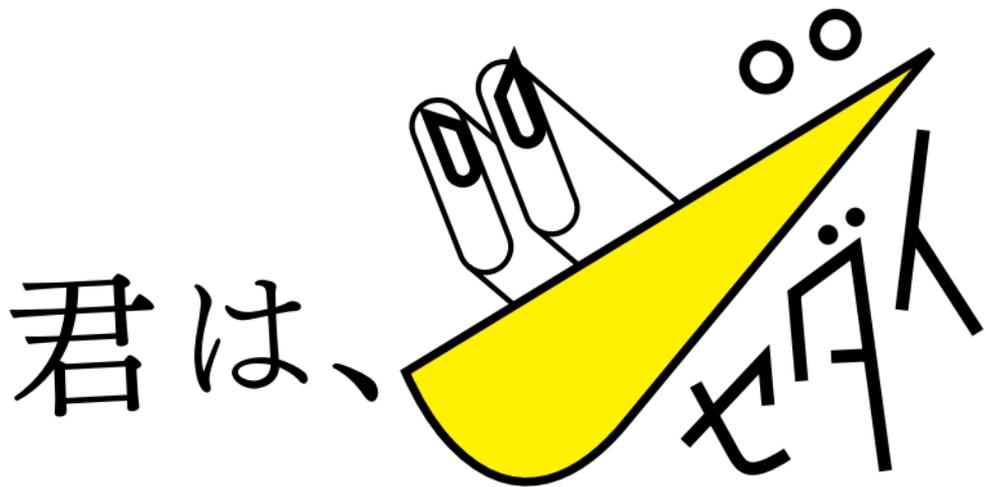
そこで本書ではUNWTOの基本的な認識に則りながら、「地域のキャパシティを超えた観光客の増加が、地域住民の暮らしや観光客の観光体験の質に受け入れがたい悪影響を与えている状況」という意味でオーバーツーリズムという言葉を使用していこうと思う。

いま日本の京都で起きている問題は京都だけに起きている問題ではない。また、世界中の歴史ある観光都市で、同様な問題が同じ時期に起こっていることも意味のない偶然では

ない。これらは同じ構造、同じ根を持った問題であり、その知見や経験も多く共有できるはずのものである。

「迷惑」「マナー違反」などと言われて、京都の「観光公害」の加害者となってしまっている外国人観光客のなかにも、その人自身、普段は京都と同じようにオーバーツーリズムに悩まされる都市で暮らしている人もいるだろう。なにより、いつも（乗降客の動線設計に明きらかな無理がある）京都駅嵯峨野線のホームで外国人観光客の壁に進路を阻まれて途方に暮れる遅刻ギリギリの僕だって、普段はしれっとした顔で「いや、趣味は海外旅行ですね」などと言っているのだ。

だからこそ、四条通で視界の死角から膝を狙ってくる観光客のキャリーケースも、「乗れないし、いちど乗ったら降りられない」市バスも、思わず目を疑うような舞妓パラッツも、うちの近所の「民泊」反対運動も、いま京都という街に押し寄せる観光客によつてもたらされるこれらの問題を、同じ問題に直面している世界の人々と同じ「オーバーツーリズム」という言葉で考えていくことに意味があるのではないかと思う。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**